

昭和10(1935)年2月 第2代 生田 有年 教授 就任



生田教授

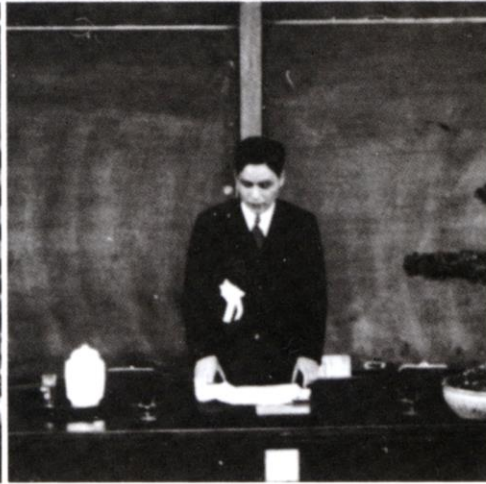
昭和10年(1935)2月18日 生田 教授第一例目手術記念写真。
黒板に描かれた図からは、大腿骨転子下骨折であったと思われる。



田平教授 神中教授 生田教授



田平栄造初代教授



生田有年教授



神中正一九大教授

昭和12(1937)年6月6日 教室開講第5周年記念祝賀会

当時の参加学会
昭和7(1932)年～16(1941)年

- 日本整形外科学会
- 日本外科学会
- 福岡外科集談会
- 九州医学会
- 九州医学専門学校集談会
- 久留米医学会総会
- 久留米医学集談会

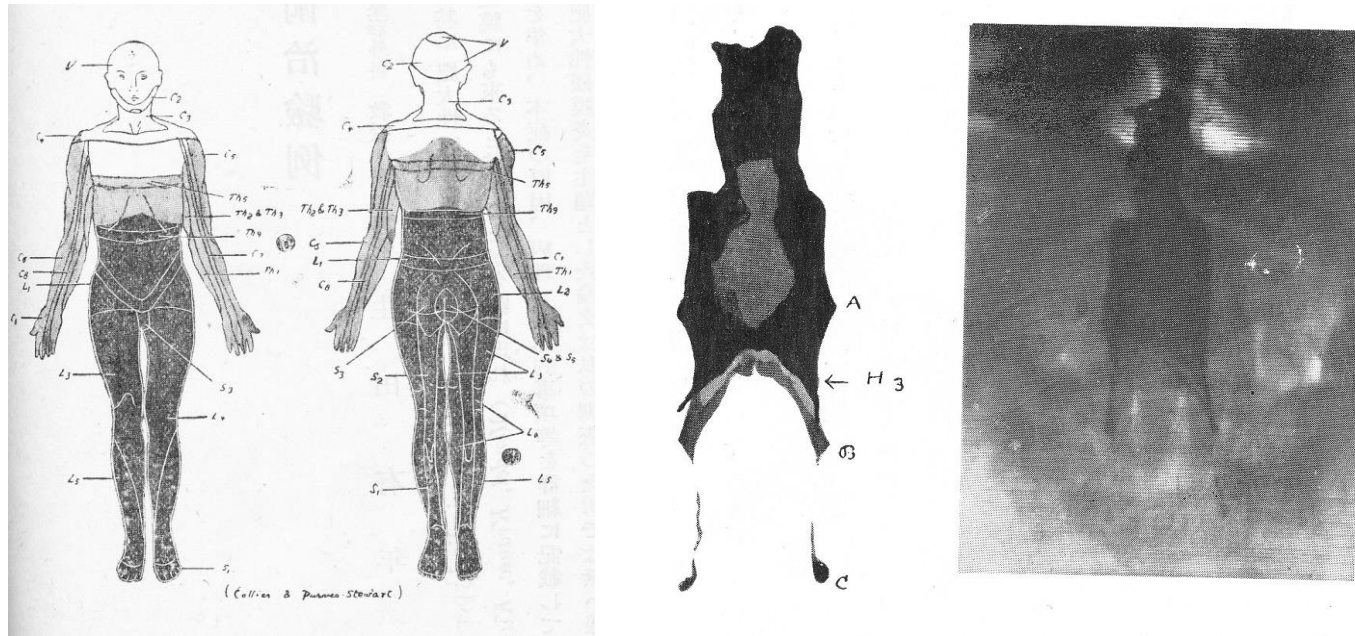
教室業績集第一巻
昭和10(1935)年～14(1939)年

総論的	5編
基礎的	5編
臨床的	18編

掲載誌

- 日本整形外科学会雑誌
- 九州医学専門学校医学会雑誌
- 九州医学会会誌
- Fukuoka Acta Medica
- 臨床雑誌 外科
- 実地医家と臨床
- グレンツゲビート、など

生田 有年:肥大性頸髄硬膜炎の一手術治験例。 治療及処方 245号,1179-1183, 1940



発症後の五年間寛解再発を繰り返した20歳、両上肢知覚運動不全麻痺、両下肢知覚運動完全麻痺。局麻にてC1-3のLaminectomy. 肥厚した硬膜の切除と廣筋膜(3.5×1.0cm)の移植。術後一年四ヶ月で完治。

原文吉：肩胛関節周囲組織の年齢的变化に就いて所謂五十肩の病理に関する研究。日整会誌、16:833-876,1941

目的：肩関節周囲炎の病態の解明のために肩関節周囲組織の経年的変化を明確にする。

材料と方法：九州医学専門学校解剖学教室と病理学教室提供の屍体標本52体104肩の肩周辺組織(粘液嚢、筋肉、腱、靭帯、関節及び関節嚢など)について肉眼的、顕微鏡的検索。そのほか昭和10年以降肩関節周囲炎の診断の確定した86例の臨床的調査。

結論：所謂五十肩は肩胛関節周囲組織(棘上筋腱・棘下筋・粘液嚢・二頭筋長頭腱等)特に棘上筋腱(主として腱分界部及び腱付着部軟骨)の年齢的变化を主因として発症する。

第二次世界大戦中の医局日誌より抜粋

昭 20.

昭. 20. 1. 10. 横山医員、西部第46部隊に入隊、去る8日より欠勤、後の、教室、生田一人となる。すべて戦争のためである。



昭和20年8月11日の爆撃で廃墟となった久留米市街地。長崎原爆の2日後であった。

一月十四日、学生境卒業迄教室=入ル。
 三月三十日、境、入局助手ヲ命ゼタル。
 四月=十日、境、醫員ヲ命ゼタル且 醫局長ヲ命ゼタル。
 六月=十日、醫員境、軍医豫備員トシテ四部第48部隊=入隊。
 六月三十日、全上、境、除隊後再ビ入局。
 七月一日、学生、大田、副島兩君卒業期迄実習トシテ教室=入ル。
 八月十一日、久留米市空爆、タメ灰燼ト化ス。
 此日、醫員境、多枚援、為メ学生⁺数名ヲ引⁺平⁺。
 烏飼国民学校=向テ、殆ドVerbrunnung⁺ナリキ。
 八月十五日、戦争終結、聖断下ル。

戦没者 6名
 土橋 兼彦 (S19),
 室井 茂俊 (S19,南方)
 江川 志真夫 (S19,南方)
 堤 健二郎 (南方)
 松尾 元 (ビルマ)
 新井 新 (硫黄島)

昭和20(1945)年1月10日 横山医員、西部第46部隊に入隊、去る8日より欠勤、後の、教室、生田一人となる。すべて戦争のためである。



第2代 生田有年教授 昭和10(1935)年～昭和22(1947)年

初代の田平教授の鹿児島への帰郷、退任に伴い九州大学より神中正一先生の推薦で32歳で着任。退任後は久留米市で整形外科医院を開業。

教室員は原文吉先生以下3名、翌年、稗田正虎以下3名入局しました。当時日本では整形外科に対する認識は薄く、九大整形でも教室員は10人足らずの時代、本学に日本で11番目の整形外科の独立講座があったことは学校経営者に慧眼と理解があったればこそでした。

収入を上げるという最大の命題を達成できなかったうちに太平洋戦争が始まり教室員も戦地に赴き、一時は私一人となったこともあり、医学機関としての機能は「ストップ」してしまっただけではありません。このような時代であったとはいえ、なんらなすことなく碌々と過ごした事は申し訳ない事と思っております。最後に戦死あるいは病死された有為の旧教室員の冥福を祈り筆を擱きます。